

<p>研究タイトル</p> <p>「乳製品の摂取意欲向上への酪農体験教育の効果の検証」</p>
<p>研究者名（所属先）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 吉田智佳子（新潟大学農学部） ・ 山口智子（新潟大学教育学部） ・ 田中知佳（新潟大学農学部）
<p>【目的】</p> <p>牛乳・乳製品の摂取意欲向上とその持続には、牛乳のヒトの健康への寄与を理解した上での酪農体験が有効である、という仮説を立て、酪農体験による情緒への働きかけが牛乳摂取意欲向上へ与える効果を、小学生、中学生および大学生を対象に明らかにする。</p> <p>【方法】</p> <p>調査① 新潟県内の小学校における牛乳に関する食育の実態調査：新潟県下越地方の小学校を対象に牛乳・乳製品に関する食育の授業および体験学習についてアンケート調査を行った。調査② 小学校低学年における酪農体験の効果：小学校7校の低学年を対象とし、担任教諭が牛乳摂取について指導した。体験区(5校)の児童は、新潟大学農学部附属農場(以下、村松 STA)を訪れ、酪農教育プログラムを体験した。調査③ 中学生における酪農体験教育の効果の検証：中学3年生を対象とし、栄養主査による牛乳摂取の重要性の講義を実施した。体験区(1校)は、大学教員による講義と村松 STAでの酪農教育プログラムを実施した。調査④ 大学生における酪農体験教育の効果の検証：農学部2年生を体験区とし、牛乳摂取について学ぶ食育セミナーを聴講した学生を対照区とした。体験区を食育セミナー受講の有無で区別した。調査②、③、④とも食育指導と体験を実施する前(事前)、直後および2か月後(事後)の3回、アンケート調査を行った。</p> <p>【結果】</p> <p>調査① 牛乳に関する食育指導は、「牛乳摂取の必要性を指導する」が最も多く、牧場見学などの体験学習は少なかった。調査② 体験区および対照区ともに給食での牛乳摂取率が講義や体験の前から高く、体験後の牛乳の嗜好性、乳製品の摂取状況、牛に持つ印象等に差は無かった。調査③ 牛乳・乳製品の講義の前後で、給食の牛乳摂取状況は変化せず、牛乳・乳製品摂取の行動変容は、両区とも講義直後に摂取への関心が高まった。2ヶ月後には、対照区では関心が低下し、体験区では持続した。調査④ 大学生では、酪農教育の体験は牛乳の摂取意欲を高めず、食育セミナーが有効であることが示唆された。</p> <p>【結論】</p> <p>小学校低学年では、食育指導および酪農教育による牛乳の嗜好性の変化はなかった。中学生では、酪農教育は酪農の有益性の認識を高め、かつ持続させ、牛乳摂取に無関心な生徒が減少した。大学生では、牛乳の摂取意欲向上には、酪農体験よりも講義が有効であることが示唆された。</p>